

森廣正著『ドイツで働いた日本人炭鉱労働者 歴史と現実』（法律文化社 2005年）
足立信彦

1957年から1965年にかけて、総勢436名の日本人が炭鉱労働者としてドイツへ赴いた。この事実を私が初めて知ったのは、今から十年近くも前、ある研究会でドイツの外国人労働者について話した時だった。会が終わった後、ひとりの老紳士が私に近づいて来て、実は自分は炭鉱夫としてドイツへ行ったことがある、と言ったのだ。彼は私に一冊の本、高口岳彦『地底の客人 -グリュックアウフの日々-』

（グリュックアウフ・ゲルゼンキルヘン会、1992年、非売品）を貸してくれた。グリュックアウフとは、鉱山の地下へ降っていく鉱員の無事を祈る挨拶語で「無事に上がってこいよ」を意味しているのだそうだ。その本には、当時まだ一般の日本人には不可能だった海外渡航を果たし、ドイツの炭鉱で働いた経験が、さらに、休暇を利用してヨーロッパを旅して回った時の見聞が生き生きと綴られていた。

私は、かつて日本からドイツへ外国人労働者として派遣された人々がいるという事実に驚くとともに、いつかその全容を知りたいものだと思っていた。

その渴をいやしてくれる書物がついに登場した。本書は、この知られざる歴史の一頁を調べ上げた労作である。

全体は二部構成になっていて、第一部は労働者派遣計画の発端（ドイツとイタリアの間に労働力供給の政府間協定が結ばれたことを知ったひとりの日本人、ある労働省官僚の頭にこの計画が宿った）からその終焉（様々な理由から当初の計画を果たさぬまま中止された）までを、労働者の個人名を可能な限り挙げながら、ほとんど細密画と言っていいような詳しさを叙述している。とくに、鉱山における坑内作業の描写は、私のような門外漢でもイメージが湧いてくるほどの迫力がある。第二部は、日本に帰国した人々、ドイツに残留した人々それぞれの「その後」である。

全体の章立ては以下の通り。

まず、第一章では日本人労働者を受け入れるに至るドイツ側の経済・労働市場の事情が簡単に説明される。つづいて第二章では、日本側が労働者派遣に至る経済的背景、具体的な経緯とそれに対するドイツ側の反応、派遣労働者の選抜条件・方法が語られる。第一陣として派遣された59人の中には「独身」という条件を満たすために「離婚」までした者が2名いたというから、当時の人々にとってこの計画がどんなに魅力的なものであったか、推し量ることができる。

第三章では、いよいよ、日本人炭鉱労働者のドイツでの仕事ぶり、生活ぶりが描かれる。彼らは複数の鉱山会社に分かれて受け入れられたのだが、会社毎に労働環境や生活環境はさまざまだったようだ。だが、坑内作業はおしなべて過酷であり、日本では許されていた途中休憩がなく、ドイツ人同様ぶっつけで働かされるため辛かったなどという記述を読

むと、ドイツ人の体力を知っている者としてはさもあると思う。その他、興味深いさまざまなディテールが仔細に描き出されている。第一陣59人は1957年1月に出発し、翌年1月から3月にかけて180名の第二陣が後につづいた。それをもって派遣計画は一時中断する。

派遣が中断した最大の理由は、その目的について、日本側とドイツ側に認識の差があったからである。炭労（日本炭鉱労働組合）は第二陣の派遣にあたって、「技術習得」のために行くはずが実態は「出稼ぎ」であるとして、当初派遣を拒否したほどであった。

再交渉の結果、第二陣は1958年に送り出されたのであるが、第四章に記述されているように、第三陣はだいぶ遅れて1960年10月末、むしろ労働力不足に悩むドイツ側の要請にこたえる形で60名が派遣された。これは、ドイツ側の希望した180名を大きく下回る数字だった。さらに、1961年11月に日本を離れた第四陣も67名という小規模なものにとどまった。

第五陣になると、今度は送り出す日本側の事情が変わってくる。すでに衰退期に入っていた日本の炭鉱は人員削減を進めていて、ドイツ派遣を離職者の受け皿と考えるようになっていた。しかし、それまでとは違って帰国後の職が保証されない身分では応募者が殺到するはずもなく、240名を予定していた第五陣はわずか70名の陣容で1962年3月、ドイツへ赴いたのである。

さて、細かな事実を労を厭わず収集したという以外に、本書はなんらかの意義を持つだろうか。たしかに、わずか数百人の日本人炭鉱労働者がドイツへ行ったというだけでは、日本にとってもドイツにとってもその歴史的意义は希薄だと言わざるを得ない。日本ないしドイツの移民・外国人労働者の研究において、この事実がほとんど注目されてこなかったのもそのせいであろう。しかし、私は、それ以外にも本書の価値はあると思う。

現在、われわれ日本人が外国人労働者問題

について語る時には、当然のように受け入れ国の立場に自分を置く。昨今のフィリピン人看護師の受け入れ問題など、その典型である。だからこそ、ドイツが同じ受け入れ国の「先輩」として注目されるのだ。だが、本書で活写されているのは、日本がまだ貧しく、ヨーロッパが憧れの対象であった時代の姿である。この本の中には、単なる外国人労働者の輸出・輸入という事柄以上のものを読み取ることができる。

たとえば、1956年の労働省職業安定局編『職業安定広報』の中では、ドイツへ労働者を送る意義が次のように説かれている。「わが国の移民問題は、従来は主として南米又はハワイに対する農業移民を中心として行われていたので、近代的労働者として然もヨーロッパのまん中へ進出することは今回がはじめてである。今後日本の労働者は国内のせまい労働市場にきよくせき(原文のママ)することなく、その勤勉、忍耐、努力と、培われた技能を生かし、大いに世界に雄飛しなければならないと思う。そのことが又現在の世界に見る如く、労働力不足のため資源の開発と経済のより高度な発展がさまたげられている国と労働力が過剰なために失業と社会的困窮が存在してい

る国とが併存している現象を解消し全世界の人類の福祉と繁栄が広く同一歩調をとって進む偉大な道に通ずることであると思われる」(36頁)。ここからは、日本がまだ労働力の送り出し国であり、「先進国」と肩を並べようと懸命に努力している時代の声が素直に聞こえてくる。

事実、派遣された労働者たちは、この計画の目的を、技術習得、西欧組合民主主義の習得、日独親善であると聞かされていた。それゆえ、実際に現地へ行って見て、実はドイツ側に技術移転の意思などなく、単なる出稼ぎ労働力として扱われていると知った時の彼らの落胆は推測するに難くない。これは、まさに今、日本に「研修」名目でやって来て、実際には低賃金労働力として利用されている外国人労働者がおかれている状況と重なるだろう。ひと昔前の日本、労働力供給国としての日本を想い起こすことは、労働力がグローバルな規模で移動するこの時代において、みずからの立場を逆転させ、送り出し国がかかえているさまざまな困難、状況への想像力を鍛えるという意味で無益ではないだろう、と私は思う。